



トラフィックの復号の概要

以下のトピックでは TLS/SSL (Transport Layer Security/Secure Sockets Layer) インспекションの概要を示し、TLS/SSL インспекション設定の前提条件と詳細な導入シナリオについて説明します。



- (注) TLS と SSL は相互に使用されることが多いため、TLS/SSL という表現を使用していずれかのプロトコルについて説明していることを示しています。SSL プロトコルは、よりセキュアな TLS プロトコルを選択することにより IETF によって廃止されました。そのため、TLS/SSL は通常、TLS のみを指すものとして解釈できます。

SSL プロトコルと TLS プロトコルの詳細については、「[SSL vs. TLS - What's the Difference?](#)」などのリソースを参照してください。

- [トラフィック復号の説明 \(1 ページ\)](#)
- [TLS/SSL ハンドシェイク処理 \(3 ページ\)](#)
- [TLS/SSL ベスト プラクティス \(9 ページ\)](#)
- [TLS 暗号化アクセラレーション \(17 ページ\)](#)
- [復号ポリシー とルール の設定方法 \(21 ページ\)](#)
- [復号ポリシー の履歴 \(23 ページ\)](#)

トラフィック復号の説明

インターネット上の大半のトラフィックは暗号化されており、ほとんどの場合、復号する必要はありません。復号しなくても、それに関する一部の情報を収集し、必要に応じてネットワークからブロックすることができます。

選択できるタイプは、次のとおりです。

- トラフィックを復号し、完全な一連の詳細検査の対象とします。
 - [高度なマルウェア防御 (Advanced Malware Protection)]
 - セキュリティ インテリジェンス

- Threat Intelligence Director
 - アプリケーション デテクタ
 - URL およびカテゴリのフィルタリング
- トラフィックを暗号化したままにしてアクセス制御をセットアップし、復号ポリシーに検索させ、ブロックできるようにします。
- 古いプロトコルバージョン (セキュアソケットレイヤなど)
 - セキュアでない暗号スイート
 - リスクが高く、ビジネスとの関連性が低いアプリケーション
 - 信頼できない発行元識別名

アクセスコントロールポリシー

アクセスコントロールポリシーは、復号ポリシーを含む、サブポリシーとその他の設定を呼び出すメイン設定です。アクセスコントロールと復号ポリシーを関連付けると、システムでは、この復号ポリシーを使用して暗号化セッションを処理し、その後でそれらのセッションをアクセスコントロールルールで評価します。TLS/SSL インスペクションを設定していない場合、またはデバイスでSSL インスペクションをサポートしていない場合は、アクセスコントロールルールですべての暗号化トラフィックが処理されます。

TLS/SSL インスペクションの設定で暗号化トラフィックの通過が許可されている場合、アクセスコントロールルールによっても暗号化トラフィックが処理されます。ただし、一部のアクセスコントロールルールの条件では暗号化されていないトラフィックを必要とするため、暗号化されたトラフィックに一致するルール数が少なくなる場合があります。またデフォルトでは、システムは暗号化ペイロードの侵入およびファイルインスペクションを無効にしています。これにより、侵入およびファイルインスペクションが設定されたアクセスコントロールルールに暗号化接続が一致したときの誤検出が減少し、パフォーマンスが向上します。

注意

管理対象デバイスが暗号化されたトラフィックを処理する場合にのみ、復号ルールをセットアップします。復号ルールには、パフォーマンスに影響を及ぼす可能性があるオーバーヘッドの処理が必要です。

管理対象デバイスでSnort 3が有効になっていれば、システムはTLS 1.3トラフィックの復号をサポートします。復号ポリシーの詳細オプションでTLS 1.3の復号を有効にすることができます。詳細については、[復号ポリシーの詳細オプション](#)を参照してください。

Firepower システムは相互認証をサポートしていません。つまり、[クライアント証明書](#)をManagement Center にアップロードして、[復号 - 再署名 (Decrypt - Resign)] または [復号 - 既知のキー (Decrypt - Known Key)] 復号ルールアクションに使用することはできません。詳細については、[復号と再署名 \(発信トラフィック\) \(12 ページ\)](#) および [既知のキーでの復号 \(着信トラフィック\) \(13 ページ\)](#) を参照してください。

FlexConfig を使用して TCP 最大セグメントサイズ (MSS) の値を設定すると、観測される MSS が設定よりも小さくなる可能性があります。詳細については、[TCP MSS について](#)を参照してください。

関連トピック

[TLS/SSL ハンドシェイク処理](#) (3 ページ)

[TLS/SSL ベスト プラクティス](#) (9 ページ)

TLS/SSL ハンドシェイク処理

このマニュアルでは、*TLS/SSL* ハンドシェイクという用語は SSL プロトコルとその後継プロトコルである TLS の両方の暗号化セッションを開始する、2 ウェイハンドシェイクを表します。

インライン展開では、システムは TLS/SSL ハンドシェイクを処理し、ClientHello メッセージを修正する可能性があり、セッションの TCP プロキシサーバーとして機能します。

以下の図はインライン展開を示しています。



(正常に TCP 3 ウェイハンドシェイクが完了した後) クライアントがサーバーとの TCP 接続を確立すると、管理対象デバイスは TCP セッションでの暗号化されたセッションの開始の試行をモニターします。TLS/SSL ハンドシェイクは、クライアントとサーバー間の特殊なパケットの交換を利用して、暗号化セッションを確立します。SSL と TLS プロトコルでは、これらの特殊なパケットはハンドシェイク メッセージと呼ばれます。ハンドシェイク メッセージは、クライアントとサーバーの両方がサポートする暗号化属性を伝えます。

- **ClientHello** : クライアントは各暗号化属性に複数のサポートされる値を指定します。
- **ServerHello** : サーバーは各暗号化属性に 1 つのサポートされる値を指定し、ServerHello 応答がシステムがセキュリティで保護されたセッション中に使用する暗号化方式を決定します。

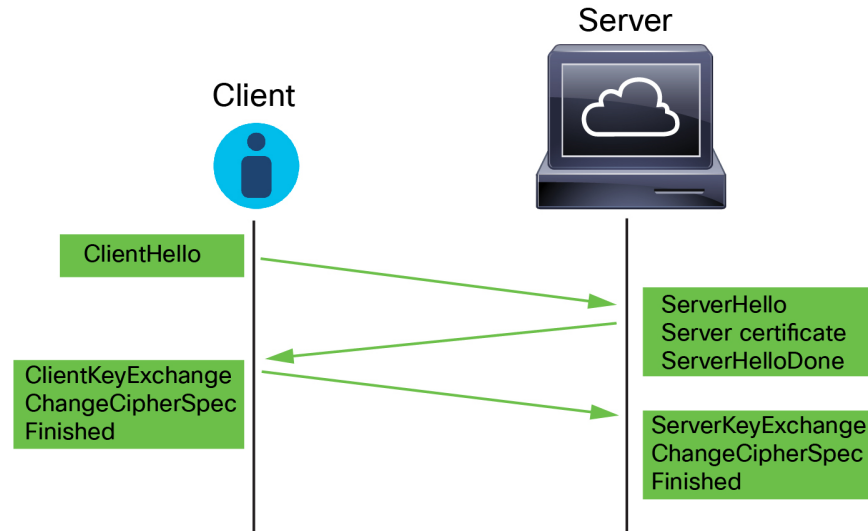
TLS/SSL ハンドシェイクが完了すると、管理対象デバイスは暗号化セッションデータをキャッシュに保存し、それによりフルハンドシェイクを必要とせずにセッションを再開できます。管理対象デバイスもサーバー証明書データをキャッシュに保存し、それにより同じ証明書を使用する後続のセッションでのより速いハンドシェイクの処理が可能になります。

ClientHello メッセージ処理

セキュアな接続が確立できる場合、クライアントはパケットの宛先として機能するサーバーに ClientHello メッセージを送信します。クライアントは TLS/SSL ハンドシェイクを開始するメッセージを送信するか、または宛先サーバーからの ServerHello メッセージへの応答に含めます。

概要

次の図は例を示しています。RFC 8446, sec. 4 も参照してください。cloudflare.com で「[What Happens in a TLS Handshake?](#)」などのリソースを参照することもできます。



このプロセスは次のように要約できます。

1. ClientHello がプロセスを開始します。

ClientHello メッセージには、サーバーの完全修飾ドメイン名を持つ [Server Name Indication \(SNI\)](#) が含まれています。

2. 管理対象デバイスが ClientHello メッセージを処理し、宛先サーバに送信した後、サーバはクライアントがメッセージで指定した復号属性をサポートするかどうかを決定します。その属性をサポートしない場合、サーバはクライアントにハンドシェイクの失敗のアラートを送信します。その属性をサポートする場合、サーバは ServerHello メッセージを送信します。同意済みキー交換方式で認証に証明書が使用される場合、サーバー証明書メッセージのすぐ後に ServerHello メッセージが送信されます。

サーバー証明書には、完全修飾ドメイン名と IP アドレスを持つ [サブジェクトの代替名 \(SAN\)](#) が含まれています。SAN の詳細については、[識別名](#) を参照してください。

3. 管理対象デバイスはこれらのメッセージを受信すると、システムに設定されている復号ルールとの照合を試みます。これらのメッセージには、ClientHello メッセージまたはセッションデータ キャッシュにはなかった情報が含まれます。具体的には、復号ルールの識別名、証明書ステータス、暗号スイート、およびバージョン条件で、これらのメッセージと照合される可能性があります。

プロセス全体が暗号化されます。

データ交換

TLS/SSL 復号を設定した場合、管理対象デバイスが ClientHello メッセージを受信すると、システムはそのメッセージを [復号-再署名 (Decrypt - Resign)] または [復号-既知のキー (Decrypt

- Known Key)]アクションを含む復号ルールと照合しようとしています。照合は ClientHello メッセージからのデータとキャッシュされたサーバー証明書データからのデータに依存します。考えられるデータには次のものがあります。

表 1: 復号ルール条件のデータの可用性

復号ルール 条件	データの存在場所
ゾーン	ClientHello
ネットワーク	ClientHello
VLAN タグ	ClientHello
ポート	ClientHello
Users	ClientHello
アプリケーション	ClientHello (サーバ名インジケータの拡張機能)
カテゴリ	ClientHello (サーバ名インジケータの拡張機能)
証明書	サーバー証明書 (キャッシュされている可能性あり)
識別名	サーバー証明書 (キャッシュされている可能性あり)
証明書のステータス (Certificate Status)	サーバー証明書 (キャッシュされている可能性あり)
暗号スイート	ServerHello
バージョン	ServerHello



(注) [暗号スイート (Cipher Suite)]と[バージョン (Version)]のルール条件は、[ブロック (Block)]または[リセットしてブロック (Block with reset)]のルールアクションが使用されているルールでのみ使用します。これらの条件をルールで他のルールアクションとともに使用すると、システムの ClientHello 処理に干渉し、予測できないパフォーマンスが生じる可能性があります。

ClientHello の変更

ClientHello メッセージが [復号-再署名 (Decrypt - Resign)]または [復号-既知のキー (Decrypt - Known Key)]ルールに一致したら、システムは ClientHello メッセージを次のように変更します。

- (TLS 1.2 のみ。TLS 1.3 は圧縮をサポートしていません。) 圧縮方法：クライアントがサポートする圧縮方法を指定する、`compression_methods` 要素を削除します。システムは圧縮されたセッションを復号できません。
- 暗号スイート：システムがサポートしない場合、`cipher_suites` 要素から暗号スイートを削除します。システムが指定した暗号スイートのいずれもサポートしない場合、システムは、元の変更されていない要素を送信します。この変更により、復号できないトラフィックの、サポートされない暗号スイートと不明な暗号スイートが削減されます。
- セッション識別子：キャッシュされたセッションデータと一致しない[セッションチケット拡張](#) (RFC 5077、セクション 3.2) と `Session Identifier` 要素から値を削除します。ClientHello 値がキャッシュされたデータと一致した場合、一時停止したセッションは、クライアントとサーバーが完全な TLS/SSL ハンドシェイクを実行せずに、中断したセッションを再開できます。この変更は、セッション再開の可能性を高め、復号できないトラフィックの、セッションが未キャッシュのタイプを削減します。
- 楕円曲線：システムがサポートしない場合、サポートされる楕円曲線拡張機能から楕円曲線を削除します。システムが指定した楕円曲線のいずれもサポートしない場合、管理対象デバイスは拡張機能を削除し、`cipher_suites` 要素から関連する暗号スイートを削除します。
- ALPN 拡張機能：システムでサポートされていないアプリケーション層プロトコルネゴシエーション (ALPN) 拡張機能から値を削除します (たとえば、HTTP/2 プロトコル)。
- 他の拡張機能：Next Protocol Negotiation (NPN) および TLS チャンネル ID 拡張機能を削除します。

[復号 - 再署名 (Decrypt - Resign)] または [復号 - 既知のキー (Decrypt - Known Key)] アクションを持つ復号ルールが、ClientHello ネゴシエーション時に Extended Master Secret (EMS) 拡張機能をネイティブにサポートし、よりセキュアな通信が可能になりました。EMS 拡張機能は、[RFC 7627](#) によって定義されています。

システムが ClientHello メッセージを変更した後、メッセージがアクセス コントロール評価 (ディープインスペクションを含めることができる) で合格するかどうかを決定します。メッセージが合格すれば、システムはそれを宛先サーバに送信します。

ClientHello メッセージが [復号-再署名 (Decrypt - Resign)] または [復号-既知のキー (Decrypt - Known Key)] ルールに一致しない場合、システムはメッセージを変更しません。次に、メッセージがアクセス コントロール評価 (ディープインスペクションを含めることができる) で合格するかどうかを決定します。メッセージが検査に合格すれば、システムはそれを宛先サーバに送信します。

トラフィックが [モニター (Monitor)] ルール条件に一致する場合、ClientHello は変更されません。

Man-In-The-Middle; 中間者

メッセージを変更した後はクライアントおよびサーバで計算されたメッセージ認証コード (MAC) が一致しなくなるため、TLS/SSL ハンドシェイク時のクライアントとサーバの間の直接通信はできなくなります。すべての後続のハンドシェイクメッセージ (および一度設定さ

れた暗号化セッション) に対し、管理対象デバイスは、中間者として機能します。ここでは2つのTLS/SSLセッションが作成され、1つはクライアントと管理対象デバイスの間、もう1つは管理対象デバイスとサーバーの間で使用されます。その結果、暗号セッションの詳細はセッションごとに異なります。



- (注) システムが復号できる暗号スイートは頻繁に更新されるので、復号ルールの条件で使用可能な暗号スイートと直接対応しません。復号できる暗号スイートの現在のリストについては、Cisco TAC に連絡してください。

関連トピック

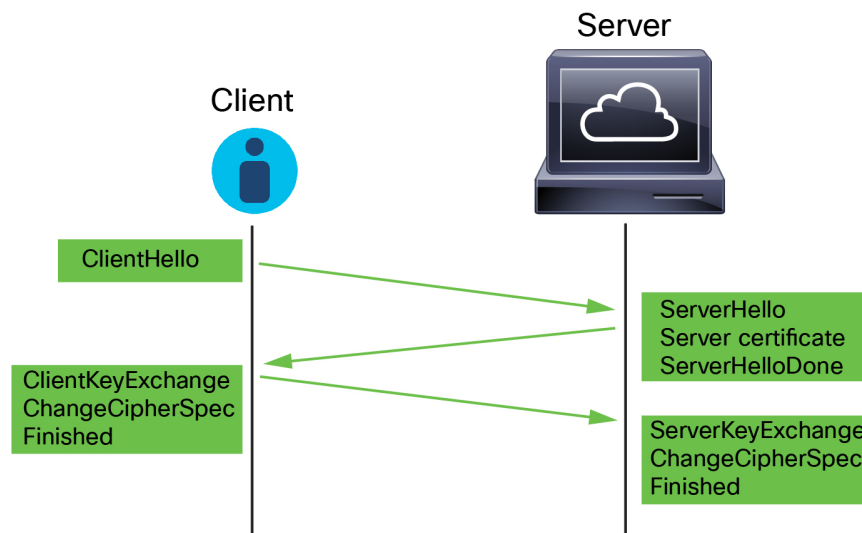
[復号できないトラフィックのデフォルト処理オプション](#)

[ServerHello とサーバー証明書メッセージの処理](#) (7 ページ)

ServerHello とサーバー証明書メッセージの処理

概要

次の図は例を示しています。RFC 8446, sec. 4 も参照してください。cloudflare.com で「[What Happens in a TLS Handshake?](#)」などのリソースを参照することもできます。



このプロセスは次のように要約できます。

1. ClientHello がプロセスを開始します。

ClientHello メッセージには、サーバーの完全修飾ドメイン名を持つ [Server Name Indication \(SNI\)](#) が含まれています。

2. 管理対象デバイスが ClientHello メッセージを処理し、宛先サーバに送信した後、サーバはクライアントがメッセージで指定した復号属性をサポートするかどうかを決定します。その属性をサポートしない場合、サーバはクライアントにハンドシェイクの失敗のアラート

を送信します。その属性をサポートする場合、サーバは ServerHello メッセージを送信します。同意済みキー交換方式で認証に証明書が使用される場合、サーバー証明書メッセージのすぐ後に ServerHello メッセージが送信されます。

サーバー証明書には、完全修飾ドメイン名と IP アドレスを持つサブジェクトの代替名 (SAN) が含まれています。SAN の詳細については、識別名を参照してください。

3. 管理対象デバイスはこれらのメッセージを受信すると、システムに設定されている復号ルールとの照合を試みます。これらのメッセージには、ClientHello メッセージまたはセッションデータ キャッシュにはなかった情報が含まれます。具体的には、復号ルールの識別名、証明書ステータス、暗号スイート、およびバージョン条件で、これらのメッセージと照合される可能性があります。

プロセス全体が暗号化されます。

復号ルール アクション

メッセージが復号ルールと一致しない場合、管理対象デバイスは、復号ポリシーのデフォルトアクションを実行します。

メッセージが、アクセスコントロールポリシーに関連付けられた復号ポリシーに属するルールに一致する場合、管理対象デバイスは必要に応じて続行します。

アクション：モニター (Monitor)

TLS/SSL ハンドシェイクは完了に進みます。管理対象デバイスはトラフィックを追跡してログに記録しますが、暗号化トラフィックを復号しません。

アクション：ブロック (Block)、またはリセットしてブロック (Block with Reset)

管理対象デバイスは TLS/SSL セッションをブロックし、設定されている場合は TCP 接続をリセットします。

アクション：復号しない (Do Not Decrypt)

TLS/SSL ハンドシェイクは完了に進みます。管理対象デバイスは、TLS/SSL セッションの間で交換されるアプリケーションデータを復号しません。

アクション：復号 - 既知のキー (Decrypt - Known Key)

管理対象デバイスは、以前に Management Center にインポートした内部証明書オブジェクトをサーバー証明書データに一致させようとします。内部証明書オブジェクトは作成できないため、また、秘密キーを所有する必要があるため、既知のキー復号を使用しているサーバーを所有していることを想定しています。

証明書が既知の証明書と一致した場合、TLS/SSL ハンドシェイクは完了に進みます。管理対象デバイスはアップロードされた秘密キーを使用して、TLS/SSL セッション中に交換されたアプリケーションデータを復号および再暗号化します。

クライアントとの初回接続と後続の接続の間でサーバーが証明書を変更した場合、将来の接続を復号するには、Management Center に新しいサーバー証明書をインポートする必要があります。

アクション：復号 - 再署名 (Decrypt - Resign)

管理対象デバイスはサーバー証明書メッセージを処理し、サーバー証明書に以前にインポートまたは生成した認証局 (CA) で再署名します。TLS/SSL ハンドシェイクは完了に進みます。管理対象デバイスはアップロードされた秘密キーを使用して、TLS/SSL セッション中に交換されたアプリケーションデータを復号および再暗号化します。



- (注) Firepower システムは相互認証をサポートしていません。つまり、[クライアント証明書](#)を Management Center にアップロードして、[復号 - 再署名 (Decrypt - Resign)] または [復号 - 既知のキー (Decrypt - Known Key)] 復号ルールアクションに使用することはできません。詳細については、[復号と再署名 \(発信トラフィック\) \(12 ページ\)](#) および [既知のキーでの復号 \(着信トラフィック\) \(13 ページ\)](#) を参照してください。

関連トピック

[ClientHello メッセージ処理 \(3 ページ\)](#)

TLS/SSL ベスト プラクティス

ここでは、復号ポリシー とルールの作成時に注意する必要がある情報について説明します。



- (注) TLS と SSL は相互に使用されることが多いため、TLS/SSL という表現を使用していずれかのプロトコルについて説明していることを示しています。SSL プロトコルは、よりセキュアな TLS プロトコルを選択することにより IETF によって廃止されました。そのため、TLS/SSL は通常、TLS のみを指すものとして解釈できます。

SSL プロトコルと TLS プロトコルの詳細については、「[SSL vs. TLS - What's the Difference?](#)」などのリソースを参照してください。

関連トピック

[復号のケース \(9 ページ\)](#)

[トラフィックを復号する場合としない場合 \(10 ページ\)](#)

[その他の復号ルールアクション \(13 ページ\)](#)

[復号ルールのコンポーネント \(13 ページ\)](#)

[復号ルールの評価の順序 \(15 ページ\)](#)

[TLS 1.3 復号のベストプラクティス](#)

復号のケース

システムを通過するときに暗号化されたトラフィックは許可またはブロックできるだけで、ディープインスペクションやすべての範囲のポリシー適用 (侵入防御など) は対象にできません。

すべての暗号化された接続：

- 復号またはブロックする必要があるか判断するために、復号ポリシーを介して送信されません。
- また、復号ルールを設定し、非セキュアな SSL プロトコルを使用するトラフィックや、期限切れまたは無効な証明書を使用するトラフィックなど、ネットワークに必要ないとわがっているタイプの暗号化トラフィックをブロックできます。
- ブロックされていないトラフィックは、復号の有無に関係なく、アクセス コントロール ポリシーを経由して、最終的に許可またはブロックの判断が行われます。

以下のような、システムの Threat Defense およびポリシーの適用機能を利用できるのは、復号されたトラフィックのみです。

- [高度なマルウェア防御 (Advanced Malware Protection)]
- セキュリティ インテリジェンス
- Threat Intelligence Director
- アプリケーション ディテクタ
- URL およびカテゴリのフィルタリング

トラフィックの復号とその後の再暗号化は、全体的なシステムパフォーマンスを低下させるデバイスの処理負荷が増加することに注意してください。

アクセス コントロール ポリシーとディープインスペクションを最大限に活用するために、トラフィックを選択的に復号することを推奨します。

次に要約を示します。

- 暗号化されたトラフィックはポリシーで許可またはブロックすることができます。暗号化されたトラフィックは検査できません
- 復号されたトラフィックは脅威に対する防御とポリシーの適用に従います。復号されたトラフィックはポリシーで許可またはブロックできます。

関連トピック

[ファイルポリシーと侵入ポリシーを使用したディープインスペクション](#)

トラフィックを復号する場合としない場合

ここでは、トラフィックを復号する場合と暗号化されたファイアウォールの通過を許可する場合のガイドラインを示します。

トラフィックを復号しない場合

次によって禁止されている場合は、トラフィックを復号してはいけません。

- 法律：たとえば、一部の法域では、財務情報の復号が禁止されています

- 会社のポリシー：たとえば、会社によって特権的な通信の復号が禁止されている場合があります
- プライバシー規制
- 証明書のピン留め (TLS/SSL ピンニングとも呼ばれる) を使用するトラフィックは、接続の切断を防ぐため、暗号化されたままにする必要があります

(Snort2) 特定の種類のトラフィックで復号をバイパスする場合、トラフィックの処理は行われません。暗号化トラフィックは最初に復号ポリシーによって評価され、次にアクセスコントロールポリシーに進みます。ここで最終的な許可またはブロックの決定が行われます。

(Snort3) 復号ポリシーは、トラフィックがプレフィルタされている場合を除き、[信頼 (Trust)]、[ブロック (Block)]、または[リセットしてブロック (Block With Reset)] のアクションを持つアクセスコントロールルールに一致する接続に関してバイパスされません。暗号化トラフィックは最初に復号ポリシーによって評価され、次にアクセスコントロールポリシーに進みます。ここで最終的な許可またはブロックの決定が行われます。

暗号化されたトラフィックは、次のものを含むがこれらに限定されない任意の復号ルール条件で許可またはブロックできます。

- 証明書のステータス (期限切れまたは無効な証明書など)
- プロトコル (セキュアでない SSL プロトコルなど)
- ネットワーク (セキュリティゾーン、IP アドレス、VLAN タグなど)
- 正確な URL または URL カテゴリ
- ポート
- ユーザーグループ

復号ルールは、このトラフィックに対して [復号しない (Do not Decrypt)] アクションを提供します。詳細については、[復号ルール \[復号しない \(Do Not Decrypt\)\] アクション](#)を参照してください。



- (注) このトピックの最後にある関連情報リンクでは、ルール評価のいくつかの側面について説明します。URL やアプリケーションフィルタリングなどの条件には、暗号化されたトラフィックに関する制限があります。これらの制限事項を必ず確認してください。

[復号しない (Do Not Decrypt)] ルールでの URL フィルタリング使用の詳細については、[復号ルール \[復号しない \(Do Not Decrypt\)\] アクション](#)を参照してください。

トラフィックを復号する場合

システムの脅威に対する防御とポリシーの適用機能を利用できるのは、暗号化されたすべてのトラフィックです。管理対象デバイスでトラフィックの復号を許可する場合 (メモリと処理能力に基づいて)、法律または規制によって禁止されていないトラフィックを復号する必要があります。

ります。復号するトラフィックを決定する必要がある場合は、ネットワーク上のトラフィックを許可するリスクに基づいて決定します。システムは、URLの評価、暗号スイート、プロトコル、その他多くの要因を含む、ルール条件を使用してトラフィックを分類するための柔軟なフレームワークを提供します。

関連トピック

- [復号と再署名（発信トラフィック）](#)（12 ページ）
- [既知のキーでの復号（着信トラフィック）](#)（13 ページ）
- [復号ルールの注意事項と制限事項](#)
- [SSL ルールの順序](#)
- [URL 条件（URL フィルタリング）](#)
- [アプリケーションルールの順序](#)
- [TLS 1.3 復号のベストプラクティス](#)

復号と再署名（発信トラフィック）

[復号と再署名（Decrypt - Resign）] 復号ルールアクションでは、システムは中間者となり、傍受、復号、および検査（トラフィックの通過が許可されている場合）し、再暗号化することができます。[復号と再署名（Decrypt - Resign）] ルールアクションは発信トラフィックで使用されます。つまり、宛先サーバーは保護ネットワーク外にあります。

Threat Defense デバイスは、ルールで指定された内部認証局（CA）オブジェクトを使用してクライアントとネゴシエートし、クライアントと Threat Defense デバイス間に TLS/SSL トンネルを構築します。同時に、デバイスは宛先 Web サイトに接続し、サーバーと Threat Defense デバイス間に SSL トンネルを作成します。

このため、クライアントには、宛先サーバーからの証明書ではなく、復号ルールで設定された CA 証明書が表示されます。クライアントは、接続を完了するためにファイアウォールの証明書を信頼する必要があります。Threat Defense デバイスは、クライアントと宛先サーバー間のトラフィックで両方向に復号/再暗号化を実行します。

前提条件

[復号と再署名（Decrypt - Resign）] ルールアクションを使用するには、CA ファイルとペアの秘密キーファイルを使用して、内部 CA オブジェクトを作成する必要があります。CA と秘密キーをまだ使用していない場合は、システムで生成できます。



- (注) Firepower システムは相互認証をサポートしていません。つまり、[クライアント証明書](#)を Management Center にアップロードして、[復号 - 再署名（Decrypt - Resign）] または [復号 - 既知のキー（Decrypt - Known Key）] 復号ルールアクションに使用することはできません。詳細については、[復号と再署名（発信トラフィック）](#)（12 ページ）および [既知のキーでの復号（着信トラフィック）](#)（13 ページ）を参照してください。

関連トピック

- [復号ルールの復号アクション](#)
- [外部証明書オブジェクト](#)

既知のキーでの復号（着信トラフィック）

[復号 - 既知のキー（Decrypt - Known Key）] 復号ルールアクションは、サーバーの秘密鍵を使用してトラフィックを復号します。[復号と既知のキー（Decrypt - Known Key）] ルールアクションは着信トラフィックで使用されます。つまり、宛先サーバは保護ネットワーク内にあります。

既知のキーを使用して復号する主な目的は、社内サーバーを外部の攻撃から保護することです。

前提条件

[復号 - 既知のキー（Decrypt - Known Key）] ルールアクションを使用するには、サーバーの証明書ファイルとペアの秘密キーファイルを使用して、内部証明書オブジェクトを作成する必要があります。



- (注) Firepower システムは相互認証をサポートしていません。つまり、[クライアント証明書](#)を Management Center にアップロードして、[復号 - 再署名（Decrypt - Resign）] または [復号 - 既知のキー（Decrypt - Known Key）] 復号ルールアクションに使用することはできません。詳細については、[復号と再署名（発信トラフィック）（12 ページ）](#) および [既知のキーでの復号（着信トラフィック）（13 ページ）](#) を参照してください。

関連トピック

[既知のキーでの復号（着信トラフィック）（13 ページ）](#)

[復号ルールの復号アクション](#)

[内部証明書オブジェクト](#)

その他の復号ルールアクション

以下では、その他の復号ルールアクションについて説明します。

関連トピック

[復号ルールのブロックアクション](#)

[復号ルール モニターアクション](#)

復号ルールのコンポーネント

復号ルールにはそれぞれ次のコンポーネントがあります。

状態（State）

デフォルトでは、ルールは有効になっています。ルールを無効にすると、システムはネットワークトラフィックの評価にそのルールを使用せず、そのルールに対する警告とエラーの生成を停止します。

位置 (Position)

復号ポリシーのルールには1から番号が付けられます。システムは、ルール番号の昇順で上から順に、ルールをトラフィックと照合します。Monitor ルールを除き、トラフィックが最初に一致するルールが、当該トラフィックを処理するためのルールになります。

条件

条件は、ルールが処理する特定のトラフィックを指定します。こうした条件では、セキュリティゾーン、ネットワークまたは地理的位置、VLAN、ポート、アプリケーション、要求された URL、ユーザ、証明書、証明書のサブジェクトまたは発行元、証明書ステータス、暗号スイート、暗号化プロトコルバージョンなどによってトラフィックを照合できます。使用する条件は、ターゲット デバイスのライセンスによって異なります。

操作 (Action)

ルールのアクションによって、一致したトラフィックの処理方法が決まります。暗号化された一致したトラフィックは、モニタ、許可、ブロック、または復号できます。復号および許可された暗号化トラフィックは、さらなる検査の影響下に置かれます。システムは、ブロックされた暗号化トラフィックに対してはインスペクションを実行しないことに注意してください。

ログ

ルールのロギング設定によって、システムが記録する処理済みトラフィックのレコードを管理します。1つのルールに一致するトラフィックのレコードを1つ保持できます。復号ポリシーでの設定に従って、システムが暗号化セッションをブロックするか、復号なしで渡すことを許可するときに、その接続をログに記録できます。アクセスコントロールルールに従ってより詳細な評価のために復号した場合の接続ログを記録するようにシステムを強制することも可能で、これはその後でどのような処理やトラフィックの検査がされるかとは無関係です。接続のログは、Secure Firewall Management Center のデータベースの他に、システム ログ (Syslog) または SNMP トラップ サーバーに記録できます。

ロギングの詳細については、[Cisco Secure Firewall Management Center アドミニストレーションガイド](#)の「Best Practices for Connection Logging」を参照してください。



ヒント 復号ルールを適切に作成し順序付けするのは複雑なタスクです。ポリシーを慎重に計画しないと、ルールが他のルールをプリエンプション処理したり、追加のライセンスが必要となったり、ルールに無効な設定が含まれる場合があります。想定どおりにトラフィックを処理できるように、復号ポリシーインターフェイスには、ルールに関する強力な警告およびエラーのフィードバックシステムが用意されています。

カテゴリ

復号ルールカテゴリ (アプリケーション、カテゴリ、証明書ステータスなど) の使用方法については、[復号ルール 条件](#)を参照してください。

復号ルールの評価の順序

復号ポリシーで復号ルールを作成する場合、ルールエディタの [挿入 (Insert)] リストを使用してその位置を指定します。復号ポリシー内の復号ルールには、1 から始まる番号が付けられています。復号ルールは、ルール番号の昇順で上から順にトラフィックと照合されます。

ほとんどの場合、ネットワークトラフィックの処理は、すべてのルールの条件がトラフィックに一致する最初の復号ルールに従って実行されます。モニタールール（トラフィックをログに記録するがトラフィックフローには影響しないルール）の場合を除き、システムは、そのトラフィックがルールに一致した後、追加の優先順位の低いルールに対してトラフィックを評価し続けることはありません。こうした条件には、単純なものも複雑なものがあります。セキュリティゾーン、ネットワークまたは地理的位置、VLAN、ポート、アプリケーション、要求されたURL、ユーザー、証明書、証明書の識別名、証明書ステータス、暗号スイート、暗号化プロトコルバージョンなどによってトラフィックを制御できます。

各ルールにはアクションも設定されます。アクションにより、アクセス制御と一致する暗号化または復号トラフィックに対してモニター、ブロック、検査のいずれを行うかが決まります。システムがブロックした暗号化トラフィックは、それ以上のインスペクションが行われないことに注意してください。暗号化されたトラフィックおよび復号できないトラフィックはアクセスコントロールの対象です。ただし、アクセスコントロールルールの条件では暗号化されていないトラフィックを必要とするため、暗号化されたトラフィックに一致するルール数が少なくなります。

特定の条件（ネットワークやIPアドレスなど）を使用するルールは、一般的な条件（アプリケーションなど）を使用するルールの前に順位付けする必要があります。オープンシステム相互接続（OSI）モデルに精通している場合は、考え方として同様の順位付けを使用してください。レイヤ1、2、および3（物理、データリンク、およびネットワーク）の条件を持つルールは、ルールの最初に順位付けする必要があります。レイヤ5、6、および7（セッション、プレゼンテーション、およびアプリケーション）の条件は、ルールの後ろのほうに順序付けする必要があります。OSIモデルの詳細については、こちらの [Wikipediaの記事](#) を参照してください。



ヒント 適切な復号ルールの順序を指定することで、ネットワークトラフィックの処理に必要なリソースが削減され、ルールのプリエンブションを回避できます。ユーザーが作成するルールはすべての組織と展開に固有のものですが、ユーザーのニーズに対処しながらもパフォーマンスを最適化できるルールを順序付けする際に従うべきいくつかの一般的なガイドラインがあります。

番号ごとのルールの順序付けに加えて、カテゴリ別にルールをグループ化できます。デフォルトでは、3つのカテゴリ（管理者、標準、ルート）があります。カスタムカテゴリを追加できますが、システム提供のカテゴリを削除したり、それらの順序を変更したりすることはできません。

関連トピック

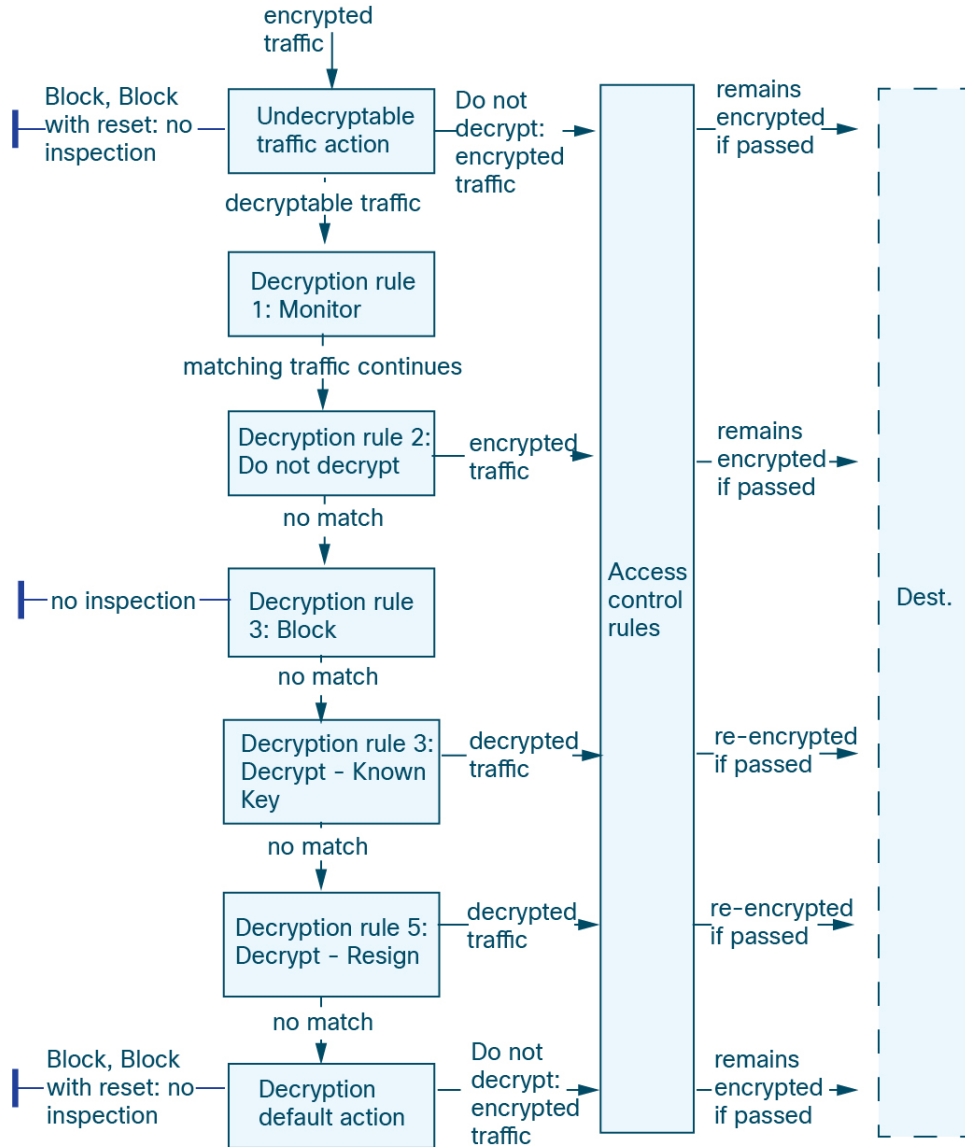
[アクセス制御ルールのベストプラクティス](#)

[復号できないトラフィックのデフォルト処理オプション](#)

[SSL ルールの順序](#)

複数ルールの例

次のシナリオは、インライン展開での復号ルールによるトラフィックの処理を要約しています。



このシナリオでは、トラフィックは次のように評価されます。

- **復号できないトラフィックアクション (Undecryptable Traffic Action)** は、暗号化されたトラフィックを最初に評価します。復号できないトラフィックについてシステムは、それ以上のインスペクションなしでブロックするか、あるいはアクセスコントロールによるインスペクション用に渡します。一致しなかった暗号化トラフィックは、次のルールへと進められます。

- **復号ルール1：モニター（Monitor）**は、暗号化トラフィックを次に評価します。モニタールールは、暗号化トラフィックのログ記録と追跡を行います。トラフィックフローには影響しません。システムは引き続きトラフィックを追加のルールと照合し、許可するか拒否するかを決定します。
- **復号ルール2：復号しない（Do Not Decrypt）**は、暗号化トラフィックを3番目に評価します。一致したトラフィックは復号されません。システムはこのトラフィックをアクセスコントロールにより検査しますが、ファイルや侵入インスペクションは行いません。一致しなかったトラフィックは、次のルールへと進められます。
- **復号ルール3：ブロック（Block）**は、暗号化トラフィックを4番目に評価します。一致するトラフィックは、追加のインスペクションなしでブロックされます。一致しないトラフィックは、引き続き次のルールと照合されます。
- **復号ルール4：復号 - 既知のキー（Decrypt - Known Key）**は、暗号化トラフィックを5番目に評価します。ネットワークへの着信トラフィックで一致したものは、ユーザーのアップロードする秘密キーを使用して復号されます。復号トラフィックはその後、アクセスコントロールルールで評価されます。アクセスコントロールルールは、復号されたトラフィックと暗号化されていないトラフィックで同じ処理をします。この追加検査の結果、システムがトラフィックをブロックする場合があります。他のすべてのトラフィックは、宛先への送信が許可される前に再暗号化されます。復号ルールに一致しないトラフィックは、引き続き次のルールと照合されます。
- **復号ルール5：復号 - 再署名（Decrypt - Resign）**は、最後のルールです。トラフィックがこのルールに一致した場合、システムはアップロードされた CA 証明書を使用してサーバー証明書を再署名してから、中間者（man-in-the-middle）としてトラフィックを復号します。復号トラフィックはその後、アクセスコントロールルールで評価されます。アクセスコントロールルールは、復号されたトラフィックと暗号化されていないトラフィックで同じ処理をします。この追加検査の結果、システムがトラフィックをブロックする場合があります。他のすべてのトラフィックは、宛先への送信が許可される前に再暗号化されます。SSL ルールに一致しなかったトラフィックは、次のルールへと進められます。
- **復号ポリシーデフォルトアクション**は、いずれの復号ルールにも一致しないすべてのトラフィックを処理します。デフォルトアクションでは、暗号化トラフィックをそれ以上のインスペクションなしでブロックするか、あるいは復号しないで、アクセスコントロールによる検査を行います。

TLS 暗号化アクセラレーション

TLS 暗号化アクセラレーション 次のことを促進します。

- TLS/SSL 暗号化および復号
- VPN（TLS/SSL および IPsec を含む）

サポート対象ハードウェア

以下のハードウェア モデルは TLS 暗号化アクセラレーションをサポートしています。

- Cisco Secure Firewall 3100
- Cisco Secure Firewall 4200
- Firepower 2100
- Firepower 4100/9300

Firepower 4100/9300 Threat Defense コンテナインスタンスでの TLS 暗号化アクセラレーションのサポートの詳細については、『*FXOS Configuration Guide*』を参照してください。

仮想アプライアンス上および上記以外のハードウェアでの TLS 暗号化アクセラレーションはサポートされていません。



(注) TLS 暗号化アクセラレーションおよび 4100/9300 の詳細については、『*FXOS Configuration Guide*』を参照してください。

サポートしていない機能 TLS 暗号化アクセラレーション

TLS 暗号化アクセラレーションでサポートしていない機能は次のとおりです。

- Threat Defense コンテナインスタンス が有効になっている管理対象デバイス。
- インスペクション エンジンが接続を維持するように設定されていて、インスペクション エンジンが予期せず失敗した場合は、エンジンが再起動されるまで TLS/SSL トラフィックはドロップされます。

この動作はによって制御されます、`configure snort preserve-connection {enable | disable}` コマンド。

TLS 暗号化アクセラレーションの注意事項と制限事項

管理対象デバイスで TLS 暗号化アクセラレーションが有効になっている場合は、次の点に留意してください。

HTTP のみのパフォーマンス

トラフィックを復号しない管理対象デバイスで TLS 暗号化アクセラレーションを使用すると、パフォーマンスに影響を与えることがあります。

Federal Information Processing Standards (FIPS)

TLS 暗号化アクセラレーションと連邦情報処理標準 (FIPS) が両方とも有効になっている場合は、次のオプションの接続が失敗します。

- サイズが 2048 バイト未満の RSA キー

- Rivest 暗号 4 (RC4)
- 単一データ暗号化標準規格 (単一 DES)
- Merkle–Damgård 5 (MD5)
- SSL v3

セキュリティ認定準拠モードで動作するように **Management Center** と管理対象デバイスを設定すると、FIPSが有効になります。このモードで動作しているときに接続を許可するには、よりセキュアなオプションを採用するように **Web ブラウザ**を設定します。

詳細については、次を参照してください。

- FIPS でサポートされている暗号方式：[SSL 設定について](#)。
- [セキュリティ認定準拠のモード](#)。
- [コモンクライテリア](#)。

TLS ハートビート

一部のアプリケーションでは、[RFC6520](#) で定義されている Transport Layer Security (TLS) および Datagram Transport Layer Security (DTLS) プロトコルに対して、TLS ハートビートエクステンションが使用されます。TLS ハートビートは、接続がまだ有効であることを確認する方法を提供します。クライアントまたはサーバが指定されたバイト数のデータを送信し、応答を返すように相手に要求します。これが成功した場合は、暗号化されたデータが送信されます。

TLS 暗号化アクセラレーションが有効になっている管理対象デバイスは、TLS ハートビートエクステンションを使用するパケットを処理する場合、復号ポリシーの [復号不可のアクション (Undecryptable Actions)] の [復号エラー (Decryption Errors)] の設定で指定されているアクションを実行します。

- ブロック (Block)
- リセットしてブロック (Block with reset)

詳細については、[復号できないトラフィックのデフォルト処理オプション](#)を参照してください。

アプリケーションが TLS ハートビートを使用しているかどうかを判断するには、[TLS ハートビートのトラブルシューティング](#)を参照してください。

ネットワーク分析ポリシー (NAP) で [最大ハートビート長 (Max Heartbeat Length)] を設定して TLS ハートビートの処理方法を決定できます。詳細については、[SSL プリプロセッサ](#)を参照してください。

TLS/SSL オーバーサブスクリプション

TLS/SSL オーバーサブスクリプションとは、管理対象デバイスが TLS/SSL トラフィックにより過負荷になっている状態です。すべての管理対象デバイスで TLS/SSL オーバーサブスクリプ

ションが発生する可能性があります。TLS暗号化アクセラレーションをサポートする管理対象デバイスでのみ処理方法を設定できます。

TLS暗号化アクセラレーションが有効になっている管理対象デバイスがオーバーサブスクライブされた場合、管理対象デバイスによって受信されるパケットの扱いは、復号ポリシーの[復号不可のアクション (Undecryptable Actions)]の[ハンドシェイクエラー (Handshake Errors)]の設定に従います。

- デフォルトアクションを継承する (Inherit default action)
- Do not decrypt
- ブロック (Block)
- リセットしてブロック (Block with reset)

復号ポリシーの[復号不可のアクション (Undecryptable Actions)]の[ハンドシェイクエラー (Handshake Errors)]の設定が[復号しない (Do Not decrypt)]で、関連付けられたアクセスコントロールポリシーがトラフィックを検査するように設定されている場合は、インスペクションが行われます。復号は行われません。

大量のオーバーサブスクリプションが発生している場合は、次のオプションがあります。

- 管理対象デバイスをアップグレードして、TLS/SSLの処理能力を向上させます。
- 復号ポリシーを変更して、復号の優先順位が高くないトラフィック用に[Do Not Decrypt]ルールを追加します。

TLS 暗号アクセラレーションのステータスの表示

このトピックでは、TLS暗号化アクセラレーションが有効になっているかどうかを確認する方法について説明します。

Management Center で次の作業を実行します。

手順

-
- ステップ 1** Management Center にログインします。
 - ステップ 2** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] をクリックします。
 - ステップ 3** [編集 (Edit)] (✎) をクリックして、管理対象デバイスを編集します。
 - ステップ 4** [デバイス (Device)] ページをクリックします。TLS暗号化アクセラレーションステータスが[全般 (General)] セクションに表示されます。
-

復号ポリシーとルールの設定方法

このトピックでは、ネットワーク上の TLS/SSL トラフィックをブロック、モニター、または許可するために、これらのポリシーで復号ポリシーおよび復号ルールを設定するために必要なタスクの概要を説明します。

このタスクを実行するには、管理者、アクセス管理者、またはネットワーク管理者である必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	[復号-既知のキー復号ルール (Decrypt - Known Key)] (内部サーバーへの着信トラフィックを復号するための) の場合、内部証明書オブジェクトを作成します。	内部証明書オブジェクトは、サーバーの証明書と秘密キーを使用します。内部証明書オブジェクトを参照してください。
ステップ 2	[復号-再署名復号ルール (Decrypt - Resign)] (ネットワーク外部のサーバーに発信トラフィックを復号するための) の場合、内部認証局 (CA) オブジェクトを作成します。	内部 CA オブジェクトは、CA と秘密キーを使用します。内部認証局オブジェクトを参照してください。
ステップ 3	復号ポリシーを作成し、オプションでルールを作成します。	同時に複数のルールを備えた復号ポリシーを作成できます。ルールなしで復号ポリシーを作成することもできます。たとえば、後でルールを追加したり、[復号しない (Do not Decrypt)] ルールアクションを使用するポリシーを作成したりします。詳細については、「復号ポリシーの作成」を参照してください。
ステップ 4	復号ポリシーのデフォルトアクションを設定します。	デフォルトアクションは、トラフィックが復号ポリシーによって定義されたルールに一致しない場合に実行されます。復号ポリシーのデフォルトアクションを参照してください。
ステップ 5	復号できないトラフィックの処理方法を指定します。	トラフィックは、セキュアでないプロトコル、不明な暗号スイートの使用、またはハンドシェイクや復号でエラーが発生した場合など、さまざまな理由で復号できなくなる可能性があります。復号できないトラフィックのデ

	コマンドまたはアクション	目的
		フォルト処理オプション を参照してください。
ステップ 6	復号ポリシーの詳細設定を構成します。	詳細設定には、HTTP/3 アドバタイズメントの無効化、TLS 1.3 復号の有効化、TLS サーバーアイデンティティプロブの有効化が含まれます。詳細については、 復号ポリシーの詳細オプション を参照してください。
ステップ 7	復号ポリシーをアクセスコントロールポリシーに関連付けます。	復号ポリシーをアクセスコントロールポリシーに関連付けていない限り、SSL ポリシーの影響はありません。関連付けた後、アクセスコントロールルールに一致するトラフィックを許可またはブロックし、その他のアクションを実行することができます。 アクセス制御への他のポリシーの関連付け を参照してください。
ステップ 8	復号されたトラフィックを許可またはブロックするようにアクセスコントロールルールを設定します。	アクセスコントロールポリシーのコンポーネント を参照してください。
ステップ 9	アクセス制御ポリシーで TLS サーバーアイデンティティ検出を有効にするかどうかを選択します。	詳細については、「 アクセスコントロールポリシーの詳細設定 」を参照してください。
ステップ 10	管理対象デバイスにアクセスコントロールポリシーを展開します。	ポリシーを有効にするには、事前に管理対象デバイスに展開しておく必要があります。 設定変更の展開 を参照してください。

復号ポリシーの履歴

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
復号ポリシー。	7.3.0	7.3.0	<p>機能をより適切に反映するために、機能の名前が復号ポリシーに変更されました。1つ以上の [復号-再署名 (Decrypt - Resign)] または [復号-既知のキー (Decrypt - Known Key)] ルールを同時に使用して復号ポリシーを構成できるようになりました。</p> <p>新規/変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ポリシー (Policies)] > [アクセスコントロール (Access Control)] > [復号 (Decryption)] (新しい復号ポリシーの作成) • [復号ポリシーの作成 (Create Decryption Policy)] ダイアログボックスには、[アウトバウンド接続 (Outbound Connections)] と [インバウンド接続 (Inbound Connections)] の2つのタブページが追加されました。 <p>[アウトバウンド接続 (Outbound Connections)] タブページを使用して、1つ以上の復号ルールを [復号-再署名 (Decrypt - Resign)] ルールアクションで構成します。(You can either upload or generate certificate authorities at the same time) . CA とネットワークおよびポートの組み合わせごとに、1つの復号ルールが作成されます。</p> <p>[インバウンド接続 (Inbound Connections)] タブページを使用して、1つ以上の復号ルールを [復号-既知のキー (Decrypt - Known Key)] ルールアクションで構成します。(同時にサーバーの証明書をアップロードできます。) サーバー証明書とネットワークおよびポートの組み合わせごとに、1つの復号ルールが作成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [ポリシー (Policies)] > [アクセスコントロール (Access Control)] > [復号 (Decryption)] (復号ルールの編集) > [詳細設定 (Advanced Settings)] には、TLS 1.3 復号のベストプラクティスで説明されている新しいオプションがあります。 • [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] > (アクセスコントロールポリシーの編集) で、[復号 (Decryption)] という単語をクリックして、復号ポリシーをアクセスコントロールポリシーに関連付けます。

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
TLS 1.3 復号。	7.2.0	7.2.0	SSL ポリシーの詳細なアクションで TLS 1.3 復号を有効にできるようになりました。TLS 1.3 復号では、管理対象デバイスで Snort 3 を実行する必要があります。 他のオプションも利用できます。詳細については、 TLS 1.3 復号のベストプラクティス を参照してください。 新規/変更画面：[SSLポリシー（SSL Policy）]>[詳細設定（Advanced Settings）]
SSL ポリシーの詳細設定。	7.2.0	7.1.0	SSL ポリシーの詳細設定 新規/変更画面：[SSLポリシー（SSL Policy）]>[詳細設定（Advanced Settings）]
レピュテーションが不明な URL の処理を指定する機能。	6.7.0	6.7.0	詳細は、 カテゴリおよびレピュテーションによる URL のフィルタリングについて を参照してください。
[復号-既知（Decrypt - Known）] キールールのための ClientHello の変更。	6.7.0	6.7.0	詳細については、 ClientHello メッセージ処理（3 ページ） を参照してください。
TLS 1.3 トラフィックで証明書を抽出して、アクセス制御ルール URL およびアプリケーションの条件とのトラフィックの照合を有効にする機能。	6.7.0	6.7.0	新規/変更された画面：[ポリシー（Policies）]>[アクセス制御（Access Control）]>（アクセスコントロール ポリシーの編集）>[詳細（Advanced）] リンク。 詳細は、 復号ポリシーの詳細オプション を参照してください。
カテゴリとレピュテーションに基づく URL フィルタリングの変更。	6.7.0	6.5.0	詳細は、 カテゴリおよびレピュテーションによる URL のフィルタリングについて を参照してください。

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
TLS 暗号化アクセラレーションを無効にすることはできません。	6.4.0	6.4.0	<p>TLS 暗号化アクセラレーションすべてのサポート対象デバイスで有効にします。</p> <p>ネイティブインターフェイスを持つ管理対象デバイスでは、TLS 暗号化アクセラレーションを無効にできません。</p> <p>Threat Defense コンテナインスタンスの TLS 暗号化アクセラレーションは、この表の次の行で示すように限定されています。</p> <p>削除されたコマンド：</p> <p>system support ssl-hw-accel enable</p> <p>system support ssl-hw-accel disable</p> <p>system support ssl-hw-status</p>
Firepower 4100/9300 モジュール/セキュリティエンジンのいずれかの Threat Defense コンテナインスタンスでの TLS 暗号化アクセラレーションのサポート。	6.4.0	6.4.0	<p>モジュール/セキュリティエンジンのいずれかの Threat Defense コンテナインスタンスで TLS 暗号化アクセラレーションを有効にできるようになりました。他のコンテナインスタンスの TLS 暗号化アクセラレーションは無効ですが、ネイティブインスタンスでは有効になっています。</p> <p>新しい/変更されたコマンド：</p> <p>config hwCrypto enable</p> <p>show crypto accelerator status replaces system support ssl-hw-status)</p>
TLS/SSL ハードウェアアクセラレーションは TLS 暗号化アクセラレーションと呼ばれるようになりました。	6.4.0	6.4.0	<p>名前の変更は、TLS/SSL 暗号化と復号アクセラレーションがより多くのデバイスでサポートされていることを反映しています。デバイスによっては、アクセラレーションがソフトウェアまたはハードウェアで実行される場合があります。</p> <p>影響を受ける画面：TLS 暗号化アクセラレーションのステータスを表示するには、[デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [デバイス (Device)]、[全般 (General)] ページ。</p>
Extended Master Secret 拡張機能がサポートされています (RFC 7627 を参照)。	6.3.0.1	6.3.0.1	<p>TLS Extended Master Secret 拡張機能は、SSL ポリシー (具体的には、[復号 - 再署名 (Decrypt - Resign)] または [復号 - 既知のキー (Known Key)] のルールアクションを持つポリシー) でサポートされています。</p>
Extended Master Secret 拡張機能はサポートされていません。	6.3.0	6.3.0	<p>拡張機能は [復号 - 再署名 (Decrypt - Resign)] ルールの ClientHello 変更時に削除されます。</p>

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
TLS/SSL ハードウェア アクセラレーションはデフォルトでは、有効です。	6.3.0	6.3.0	TLS/SSL ハードウェア アクセラレーション デフォルトですべてのサポート対象デバイスで有効になっていますが、必要に応じて無効にすることができます。
Extended Master Secret 拡張機能がサポートされています (RFC 7627 を参照)。	6.2.3.9	6.2.3.9	TLS Extended Master Secret 拡張機能は、SSL ポリシー (具体的には、[復号 - 再署名 (Decrypt - Resign)] または [復号 - 既知のキー (Known Key)] のルール アクションを持つポリシー) でサポートされています。
アグレッシブ TLS 1.3 ダウングレード。	6.2.3.7	6.2.3.7	system support ssl-client-hello-enabled aggressive_tls13_downgrade {true false} CLI コマンドを使用して、TLS 1.2 への TLS 1.3 トラフィックのダウングレードの動作を決定できます。詳細については、 Cisco Secure Firewall Threat Defense コマンドリファレンス を参照してください。
TLS/SSL ハードウェア アクセラレーションが導入されました。	6.2.3	6.2.3	特定の管理対象デバイス モデルでは、パフォーマンスが向上する、ハードウェアでの TLS/SSL 暗号化および復号が実行されます。デフォルトでは、この機能は有効です。 影響を受ける画面：TLS/SSL ハードウェア アクセラレーションのステータスを表示するには、[デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [デバイス (Device)]、[全般 (General)] ページ。
カテゴリとレピュテーションの条件がサポートされています。	6.2.2	6.2.2	カテゴリ/レピュテーションの条件を使用したアクセス コントロールルールまたは SSL ルール。
セーフサーチをサポート	6.1.0	6.1.0	SSL ポリシーにより復号され、その後アクセス コントロールルールまたはアクセス コントロール ポリシーのデフォルト アクションによりブロック (またはインタラクティブにブロック) された接続については、HTTP 応答ページが表示されます。このような場合、システムは応答ページを暗号化して、再暗号化された SSL ストリームの最後にそれを送信します。 SafeSearch により好ましくないコンテンツがフィルタリングされ、成人向けサイトの検索が停止されます。
TLS/SSL ポリシー	6.0.0	6.0.0	導入された機能。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。